

イギリスの古典的ジョークに次のようなものがある。

ある男が、隣の家に芝刈機を借りに行った。道すがら、男は相手になると言われるだろうかと思像しながら歩く。

——芝刈機を貸してくださいと言ったら、「どうして自分で買わないのですか」と言われるのではないかと答えた。でも、待てよ。「それならローンで買えばいいではないですか」と言

われるかもしれない。そしたら、金を借りるのは好きではないんです、と答えてやろう。

だけど、あいつのことだから「そんなことを言っても、現にあんたは人の家にもものを借りに来たじゃないですか」と皮肉るにちがいない。

ちようどそのとき芝刈機を借りようと思った当の隣人と道端で出くわした。男は想像の続きで、思わず、こう怒鳴ってしまう。

「あんたの下らん芝刈機なんか借りてやるものか！」

これはジョークだが、ここには人間の持つ生まれた精神機能の特徴がよく現れている。

ある学者に言わせると、人間とそれ以外の動物を分けるもつとも大きなポイントが、人間が「頭の中でいつまでも過ごすことができる」点だ

という。このため、芝刈機を借りに来た男のように、頭の中で想像を巡らせた末に、その想像にがんじがらめになって現実が見えなくなってしまうのである。

同じ霊長類でもチンパンジーなどは、人間のようにイメージを頭の中で長時間、保持することができないとされている。このため、目の前に

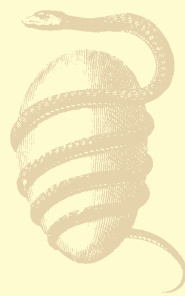
旅の曲者

37

殴られたら痛い

文・写真／田中真知
Tanaka Mochi

イラスト／bozen



をもって、本人を支配する。芝刈機を借りに行った男が怒鳴るくらいにいいが、病的になると不安神経症などにまで発展してしまうのだ。

もちろん、こうした思い込みの強さには個人差がある。いくら周りから無視されても、自分は人に好かれていると思っ

て、いつまでも恨みに思っている人

もいる。

人によって、同じ言葉であっても受け取り方が違ってしまふのには、いろんな理由がある。よく言われるのが、親の育て方とか、子供のころのトラウマといった問題である。

特にトラウマという精神医学用語は最近では、すっかりポピュラーになった。「その程度のことだ」と思うようなことでも、「トラウマになった」という言い方が普通にされる。トラウマがあるから自分は現実に適応できないんだとか、トラウマのせ

いで私は些細なことでも傷ついてしまふのだと言って、何かというトラウマが言い訳にされるとい傾向が目立つ。

トラウマというものが存在しないとは言わない。しかし、トラウマを引き合いに出すあまり、いつまでたってもそのせいにしているのは状況はちつとも変わらないのではという気もする。

何年前か前、ハリリー・ポッターブームのころ、日本のアイドルタレントの女の子がイギリスの全寮制の名門高校を訪ねるとい企画のテレビ番組をたまたま観た。イギリスの男子高校生が寮内を案内しながら、寮生活のさまざまなエピソードを話すのだ。そのとき、寝室で新入生に行く伝統のないずらの話が出た。

「新入りの頭に袋を被せるんだ。そして他の生徒が上からのしかかって、みんな袋たたきにされるんだ。俺もやられたよ」

それを聞いたアイドルタレントの女の子は驚いて言った。

「そんなことされたら、心に深い傷を負ってしまうのではないの？」

しかし、男子高校生は不思議そうな顔をして言った。
「心の傷？ ただ痛いだけだよ」
殴られたら痛い、ただそれだけのことだ。しかし、そこにさまざまな



撃たれたら、痛いでは済まないだろう……。エルサレムのイスラエル兵士たち。

意味を付け加えて、歪めて、膨らませてしまうのが人間の心の特徴である。しかも、そのことをトラウマとして、ことさらに重大視することは、かえって本人の思い込みを強める結果となりかねない。

どうして彼は僕を殴ったのか、僕には殴られる理由があったのか、僕がそうだったのは両親の育て方の問題だったのか、実は母は僕を愛して

いなかったのではないか、そんな答えのない質問の堂々巡りをカウンセラーと称して引つ張り出すことに、どれほどの意味があるのかわからない。むしろ、殴られたら痛い、それだけのことだと言う、このイギリスの高校生の言葉のほうが遥かに健全な気がした。

ただし一方で、「頭の中でいつまでも過ごすことができる」という精

神の機能は、生きる希望を与える強いやすがにもなるのも事実なのだ。どこで読んだのか思い出せないのだが、こんな話がある。

第二次世界大戦中のこと、ドイツの収容所に強制収容された捕虜たちが日に日に生きる望みを失っていく。そのとき一人の捕虜が、自分たちの中に一人のかわいい女の子がいることにしよう、と提案する。捕虜たちは、たとえどんなに苦しく、つらいときでも、自分たちの中にはその子がいると想像する。弱音を吐きなくなったり、自暴自棄になりそうなどときでも、その子がいるから、男らしく振舞おうとした。下品な話もせず、紳士的に振る舞い、その子を喜ばせるような楽しい話をした。その子を驚かせるために所内の花を摘んでブーケを作ったりもした。

ドイツ兵たちは捕虜たちの様子に不審をいだき、部屋を調べた。けれども、なにも出てこない。さんざん調べ上げた結果、どうやら捕虜たちのなかに想像の女の子がいることが

わかる。ドイツ兵たちは捕虜に対して、その子を引き渡せと言うが、捕虜たちは命に賭けても渡せないと言うのだ。

他人がどれほどの暴力を行使しても奪えない唯一のもの、それが想像力である。

残念ながら、この先がどうだったか覚えていないのだが、想像力というものは、使い方によっては、現実の苦しさを超えて、人間を生命力に満たしてくれるものだということが伝わってくる。

トラウマや過去の経験の周りをぐるぐる回っているばかりでは、せっかくの想像力の持つ素晴らしさも矮小化されてしまう。過去をほじくり返すために想像力を用いるのではなく、現在を切り崩すために想像力を用いること、それこそが精神の健康をもたらすのではないか。殴られたことによっては、心にとどのような傷を負ったのかなんでどうでもいいことなのだ。殴られたら痛い。それで十分である。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、『惑星の暗号』（翔泳社）など。